

やせているキツネがいた。

周りに自然もない、この街中のキツネはどこか浮かび上がって見えた。

ぼくは、かわいそうになり、持っていたパンをキツネに投げた。

腹骨が見えているキツネは、不思議そうにパンに近づき、においをかぐと

一口かじるなり、耳をぴくつとさせ、パンをくわえたまま街の中に消えて行った。

ぼくは、鼻の穴をふくらませ、（いいことをした。）と帰路につく。

「ぼっかもん！」

不意に背後からどなり声がした。白衣を着た、知らないおじいさんだ。

「お前みたいなやつがいるから、こういうキツネがふえるんだ。」

ぼくは、むっとなり、

「じゃあ、パンをあげないで見殺しにすればよかったのですか。」

と強く聞き返し、すぐに気がついてこうかいした。

ここは周りに自然のない、街中であつた。

問題一    どんなキツネがいましたか。

氏名

問題二    ぼくがした、いいこととは何か。

問題三    ぼくは、何に気がついてこうかいしたでしょうか。

※終わったら主語述語